

潜在的態度の気づきは自己のありようについてなにを語るのか

薄井 尚樹 (Naoki Usui)

関西大学

潜在的態度 *implicit attitude* は、とりわけそれに注目された当初、本人がそれに気づいていないような心的状態だとしばしば考えられていた (e.g., Greenwald & Banaji, 1995)。たとえば、潜在的態度を測定するもっともポピュラーな方法のひとつとして「潜在連合テスト *Implicit Association Test (IAT)*」を挙げることができるが、その考案者である Anthony Greenwald と Mahzarin Banaji は、潜在的態度を「内省を通じて同定できない (あるいは不正確に同定される) 過去の経験の痕跡であり、社会的対象に向けられた好意的ないし好意的でない感じ、思考、あるいは行為を媒介する」(Greenwald & Banaji, 1995, p. 8) と定義した。

このように (とりわけ *IAT* を用いた) 初期の研究では、本人が自分の潜在的態度に気づいていないことは、しばしば顕在的態度に気づいていることと対比されるかたちで (e.g., Nosek, 2007)、潜在的態度の一般的な理解を形づくっていたように思われる (このような理解に至った歴史的経緯については、Gawronski, De Houwer, & Sherman (2020) を参照)。

しかし、そのような気づきの欠如という潜在的態度の特徴を疑問視するような研究が、最近になって増えつつある。その先駆けとなった代表的な研究として、Hahn, Judd, Hirsh, & Blair (2014) を挙げることができる。その研究では、被験者に本人がこれから受ける *IAT* における自身の結果を予測してもらったところ、その予測が驚くほど正確であることがわかった。このことは、被験者が自身の潜在的態度に気づいていることを強く示唆するだろう。また、Hahn et al. (2014) とは手法が異なるが、*IAT* とおなじく潜在的態度の測定としてポピュラーな方法である「感情誤帰属手続き *Affect Misattribution Procedure (AMP)*」における気づきの欠如を疑問視する研究として、Hughes, Cummins, & Hussey (2023) がある。このように、潜在的であることがなにを意味するにせよ、潜在的であることと気づきの欠如あるいは無意識であることは、現在、切り離されて考えられるのが主流だと言っているように思われる (e.g., Greenwald & Banaji, 2017)。

このような近年の研究の展開は、潜在的態度を無意識の心的状態と想定したうえでなされてきた従来の潜在的態度をめぐる哲学的議論に、再考を求めることになる (たとえば、そのような研究動向をふまえたうえで、潜在的態度の「潜在性」がなにを意味するのかを考察したものとして、Holroyd, Scaife, & Stafford (2017) を挙げることができる)。本発表では、そうした哲学的議論のなかでも、本当の自己や疎外をめぐる問題 (e.g., Glasgow, 2016)、特に「かりに本人が自分の潜在的態度に気づいているとして、そうした (ときに顕在的態度と乖離しうる) 潜在的態度の存在がそのひとの自己のありようにおいてもつ意味はなにか」という問いに焦点を当てて、吟味したい。

参考文献

- Gawronski, B., De Houwer, J., & Sherman, J. (2020). Twenty-five years of research using implicit measures. *Social Cognition, 38*(Supplement), s1–s25.
- Glasgow, J. (2016). Alienation and responsibility. In M. Brownstein & J. Saul (Eds.), *Implicit Bias and Philosophy vol.2: Moral Responsibility, Structural Injustice, and Ethics* (pp. 37–61). Oxford University Press.
- Greenwald, A., & Banaji, M. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review, 102*(1), 4–27.
- Greenwald, A., & Banaji, M. (2017). The implicit revolution: Reconceiving the relation between conscious and unconscious. *American Psychologist, 72*(9), 861–871.
- Hahn, A., Judd, C., Hirsh, H., & Blair, I. (2014). Awareness of implicit attitudes. *Journal of Experimental Psychology: General, 143*(3), 1369–1392.
- Holroyd, J., Scaife, R., & Stafford, T. (2017). What is implicit bias? *Philosophy Compass, 12*(10), e12437.
- Hughes, S., Cummins, J., & Hussey, I. (2023). Effects on the affect misattribution procedure are strongly moderated by influence awareness. *Behavior Research Methods, 55*(4), 1558–1586.
- Nosek, B. A. (2007). Implicit–explicit relations. *Current Directions in Psychological Science, 16*(2), 65–69.

・本発表は JSPS 科研費 JP21K00031 の助成を受けたものです。